

ことは、ある意味で驚くべきことであり、またこのプラトニズムとルネサンス思想とにある種の連続がみられることは、きわめて興味深いと思われる。

提題 ルネサンスのプラトニズムについて
 ——プラトン著作の受容を中心として——

清 水 純 一

ルネサンス期のプラトニズムを代表するものとしては、16世紀後半のフィレンツェに栄えた、フィチーノを長とするいわゆるプラトン・アカデミアのそれをあげるのが一般であろう。しかし総体的にみれば、プラトニストとよばれる者は、オトルクルのニコラウスやクサーヌスなど、各地に散在し、さらにアウグスティヌスやマクロビウスやポエティウスらを介して間接にプラトニズムを継承する人々をも含めれば、きわめて広汎多岐にわたる。ここでは、プラトンの著作が、直接的に、どのような径路を辿ってヨーロッパで読まれたし、その影響力を浸透させていったのか、という点を中心に考察をすすめたいと思う。したがって、まず、ペトラルカ以後、とくに15世紀前半のフィレンツェでプラトン著作がラテン語訳されていた道筋を中心にその跡を辿りながら、その大成者たるフィチーノに及ぶことにしたい。

I

ルネサンス・プラトニズム興隆の祖として最初にあげられるべき者は、Petrarca (1304-74) である。彼が古代心酔者として古典の蒐集に熱中したことは、あまりにも有名で、プラトンの著作集についても二種類のギリシア手稿を入手し、折に触れてプラトンの偉大さを説き、著書『勝利』のなかでプラトンをアリストテレスの右においたことは、プラトニストとしての名声をあまねく知れわたらせた。しかし、ペトラルカがプラトンの著述そのものからどれほどの影響を受けたかはかなり疑問で、ギリシア語をほとんど読めなかった彼にとって、手稿は「物言わぬ紙」であったし、当時目にしうるラテン語訳といえば、『ティマイオス』『メノン』『パイドン』

(他にプロクロスのパルメニデス註解)に限られていたわけであるから、ペトラルカのパラトニズムとは大部分がアウグスティヌスやキケロを介してえられたものであったに違いない。むしろプラトニストとしてのペトラルカの重要性は、プラトンの再評価を通してアリストテレスに対する批判的視野を呈示した点にある。即ち、アリストテレスをそれ以前の哲学の集大成として完結した知識体系と見做す中世伝説に、プラトン重視という形で疑問を提起したところに、新しい時代を開拓する意義があったのであって、この態度は彼のプラトン以前の自然哲学評価にも共通するものであり、また Nicola d'Autrecourt にも通ずるものであった。

ペトラルカによって用意されたプラトンへの道は、Salutati (1331-1406) によって継承される。彼はギリシア語学習の重要性を痛感して、ビザンツ学者 Chrysoloras を招き、1397年からフィレンツェでギリシア語を教えさせた。そのフィレンツェ来住は、期間こそ数年を出なかったが、きわめて重要な意義をもつものであった。以来ギリシア学は、フィレンツェを中心にイタリア全土に隆昌し、ギリシア古典が次々に紹介翻訳されることとなったからである。プラトンについても、Dicembrio と共同して『国家』を訳した(1400頃)。この共訳は、訳としては不評であったが、『国家』はこれを嚆矢として15世紀の間に多種類もの翻訳が試みられることとなる。さらにサルターティの後を継いでフィレンツェ書記官長となった Bruni (1369-1444) は、彼の高弟であると同時にクリュソロラスの弟子であり、1405年には『パイドン』を訳了した。その後、書記官長となってからも、余暇を見てはプラトンの訳を続け、『ゴルギアス』(1409)、『パイドロス』『ソクラテスの弁明』『クリトン』(1424頃)『饗宴』(1435)を訳した。

こうしてプラトンの著作は1400年を境にして続々と紹介されるようになる。この時代のプラトン流行は、初期ウマニスタたちの活動と密接に結びついていた。そこには、ペトラルカと共通の関心がみられながらも、他面において固有の特色があったことも見逃すべきではない。即ち、初期ウマニスタたちを一貫する政治的実践的関心と密着していた点である。したがって、アリストテレス批判的動因もないではないが、むしろプラトンの関心の中心におかれたものは、その政治観であり、地上的人間活動であった。この点で『国家』や『ゴルギアス』が惹き起した反響は大きかった。サルターティをはじめとするウマニスタたちは、彼等の最大の関心事で

あった都市国家の理念を『国家』のなかに求め、逆にまたプラトンの理想国をフィレンツェに具現することを夢見たのであった。換言すれば、彼等のプラトン熱はソクラテス熱であった。そしてソクラテスは、実践生活を導く最良の師とされ、理想的人間として仰がれた。上述のブルーニの訳したプラトン諸著作もこの関心傾向を明示するものであり、1423年頃、Polizianoが『カルミデス』を、Aretinoが『クリトン』『エウテュプロン』『アクシオコス』を訳したのも、これとの同一線上において考えられるであろう。

フィレンツェに理想的都市国家を実現したいと望んだ初期ウマニスタの憧れは、15世紀中葉ともなると屈折して、その民主制は次第に擡頭するメディチ家の独裁制へと移行する。これと呼応するかのように、プラトンの関心も新たな段階を迎える。1438年から1443年にかけて開かれた東西宗教会議、さらにこれに続くコンスタンチノポリスの陥落(1453)を機に、ビザンツから多勢の学者たちがイタリアに流入し、ギリシア学にも新時代が到来する。その代表的人物は、Plethon, Bessarion, Gaza, Trapezuntios, Argyropulosらである。この変化を表面的に総括すれば、ビザンツ学者同士の間で争われていた哲学論争が、そのままイタリアにも移入されて、プラトナーリストテレス論争が関心の焦点となり、一方プラトンの関心は、ソクラテス的実践哲学的なものから、神秘的神学的なものへと移行したことである。

この方向を推進した最初の者がプレトンであった。彼はビザンツ古典学者中でも最も熱烈なプラトン崇拝者であり、そのプラトン解釈はプラトン哲学のうちに崇高な宗教的使命を認める、いわば神秘的プラトン神学的なものであった。東西宗教会議を機にフィレンツェを訪れたプレトンは、人々に強い影響を与えたが、とくにメディチ家のコジモとの接触は、コジモのプラトンに対する関心を喚起し、やがてプラトン・アカデミアの設立を将来することとなる。

こうして今や、プラトン神学がアリストテレス神学に代って、絶対的権威を誇示し始めたかに見えた。これにまず烈しい反撥を示したのがトラベズンティオスで、彼はプレトンを、プラトンを神聖視するあまりにキリストを拒否する者だと非難し、さらにプラトンに親近感を寄せるガザをも攻撃して、イタリアに蔓延るプラトニズムの風潮をキリスト教の異端化的腐敗の症候として感じとったのである。もっとも、トラベズンティオスが頭からのプラトン哲学の無理解者ではなかったことは、『パ

ルメニデス』『法律』『エピノミス』の訳出に、彼自らが参加しているところからも窺える。ただ時代的危機の克服をひたすら、キリスト教会の建て直しによって期待した彼は、プラトニズム的風潮による教会権威の風化を危惧し、アリストテレス神学の再強化によって捲き返す必要を痛感したものとも考えられる。これはアルベルトゥス・マグヌスを尊重する彼の立場にも通ずるものである。いずれにせよトラペツンティオスのプラトン批判は、その後の方向——プラトンとアリストテレスとの融和、キリスト教的プラトン神学化——を決定づけるにあずかって、大きな役割を果たしたことは否めまい。この新方向を押し進めた代表者が、ベッサリオンであった。そして彼の融和理念の背景に、東西キリスト教会統合の夢が秘められていたことは、言うまでもない。

II

15世紀前半にもたらされたギリシア学の発展変化は、クリュソラスとアルギュロプロスのフィレンツェに招かれた職責の比較からも推測される。前者が招かれたときはギリシア語学の教師にすぎなかったのに対し、後者が受け持つことを依頼された講座は哲学であった。1457年以後、彼は公式にはアリストテレスを講ずるかたわら、私的にプラトンを教えた。その解釈は、一言でいえば、アリストテレスとプラトンを新プラトン化したもので、自らの手でプロティノスの翻訳をも試みている。ここにはすでに、初期ウマニスタのプラトニズムが辿りつくべき到達点が暗示されているといえよう。即ち、ソクラテス—プラトンから、プラトン—アリストテレスの対立へ、そしてこの対立をプロティノスの立場から融合しようとする試みへ。この方向はまさしく Ficino (1433-99) の途に他ならなかった。と同時に彼によってプラトンの全著作訳がはじめて完了されたのであった。

フィチーノはメディチ家の侍医の息子として生れた。上述のように、プラトンからプラトン熱を吹き込まれたコジモは、プラトン著作の全訳をもちたいと願い、これはフィチーノに期待した。そこでギリシア古典手稿（プラトンを含む）をカレッジ別邸に蒐集して、ここにアカデミアを創ることを思いたち、その運営をフィチーノに委ねた（1459）。これが Accademia Platonica と呼ばれるものである。以来フィチーノは、その学頭として、知識人を集め研究集会を開くかたわら、プラトンの

翻訳に没頭した。その保護者は勿論メディチ家であり、学芸に関心の強かったロレンツォは自らもその集会に参加したので、彼等はメディチ・サークルとも呼ばれた。またプラトンに傾倒していたフィチーノは、仲間をプラトンの兄弟たちと呼び、プラトンの饗宴を模してしばしば知的談合を催した。この集会は、やがて、フィレンツェのみならず全イタリアに有名になり、さらにプラトン・アカデミアの名前はイタリアを超えて全ヨーロッパに拡がり、各国から偉れた知識人たちが競ってここを訪れるようになった。そのなかには Agricola, Linacre, John Colet といった名がみえる。

フィチーノがプラトンの翻訳にとりかかったのは1459年のことであるから、以来20数年間をこの仕事に捧げたことになる。これはヨーロッパがもちえた初めてのプラトン全訳であり、たまたま印刷術の開拓期と重なるという幸運をえて、1484年に公刊され全世界に普及した。つづいてフィチーノはプロティノスの訳にかかり、1486年にこれを完了している。

フィチーノは、プラトン訳の公刊に先立つ二年前の1482年に、その主著『プラトン神学』を公刊している。そしてこのなかに、フィチーノのプラトン解釈の立場を明白に表明している。その主題は一種の存在論であるが、静態的存在論というよりも動態的存在論というべきもので、存在の諸秩序を貫流するリズムを認め、宇宙靈に呼応する人間靈魂の上昇（下降）の機能を重視し、人間靈魂の上昇による神との神秘的合一の憧れのうちに、全人類に共通する *pia philosophia* が成立つと主張する。彼によれば、これこそプラトン哲学の真髄であり、宗教的対立を融和する唯一の基盤である。

このようなフィチーノの哲学が、プラトンよりもプロティノスに近いといわれ、それ故フィレンツェのプラトニズムは、むしろネオ・プラトニズムと呼ばれるべきだと言われるのも、理由のないことではない。またフィチーノが、プラトン哲学と中世キリスト教哲学との合一を求めたものとされるのも、間違いではあるまい。事実彼の『プラトン神学』には、諸学説の対立を「敬虔の哲学」によって包摂統合したいという希求が秘められているからである。この志向は、Pico della Mirandola (1463-94) によって一層はっきりと宣言される。

しかしその反面に、フィチーノの哲学は、アリストテレストマス、プラトナー

プロティノスの合成のみから生れるものでもない。彼の哲学のなかにはそれ以外の多くの思想諸源泉が（とくにヘルメス的思想要因は重要である）入り組んでいる。それら諸要因の多様さが、彼を折衷主義として非難する原因となっており、また事実その総合に曖昧さの残っていることも確かではあるが、そのことによってフィチーノの重要性を軽視することは許されない。フィチーノが総合しようと努めた思想要因の多様さこそ、まさしくフィチーノが生れ育ったイタリア・ルネサンスの、東西文化交流の渦の中心であったフィレンツェの思想環境を象徴するものだからであり、またそのなかでフィチーノは、少くとも若干の独自の思想形成に成功しているからである。（このフィチーノ哲学の独自性について口演では若干触れたが、今回の記録では省略する）

ともかくも、フィチーノを中心とするプラトン・アカデミアの活動は、*pia philosophia* の立場に立つ寛容融和の理念とともに、プラトニズムの再興をもたらした。このプラトニズムのフィチーノ的展開は、フィレンツェに極限して眺めれば、コジモ理念の完成であったとも考えられる。そして、ロレンツォは自らの周囲にプラトン・アカデミアを中心とする知識活動を集結して、その勢力均衡政治のイデオログとして活用することができた。しかし、ロレンツォの夭折とともに、政局は転換し、プラトニズムの影響は、福音主義、自然哲学（太陽中心の天体革命）、愛の文学といった諸相を通して、16世紀イタリアに拡散浸透する。一方、アルプスの北に拡大したプラトニズムは、プラトン学の普及化とともに、ヨーロッパの各地（とくにイギリス）に、多くのプラトニストを輩出することとなったのである。